

## 日本戦後文学における動物の表象について : 武田 泰淳・大江健三郎・小島信夫を対象に

|         |   |
|---------|---|
| 著者      | 村上 克尚   |
| 学位授与年月日 | 2016-02-29  |
| URL     | <a href="http://doi.org/10.15083/00073173">http://doi.org/10.15083/00073173</a> |

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名： 村上 克尚

村上克尚氏の博士号請求論文『日本戦後文学における動物の表象について——武田泰淳・大江健三郎・小島信夫を対象に』は、標題の三人の作家の主要作品における動物の表象を分析対象としながら、日本における戦後的理念としての「人間性」について検証をした論文である。

第一部では武田泰淳の『審判』(1947)、『風媒花』(1952)、『ひかりごけ』(1954)を取り上げ、戦争において最も鋭く問われる「殺害しても良いもの」と「殺害してはならないもの」が国家によって決定されている事実を明らかにしている。敗戦直後の上海、朝鮮戦争のときの日本、戦時下の遭難と、それぞれの小説の状況設定が異なっている中で、動物の位置づけられ方とおして、戦争という大量殺人に加担している国民の在り方を、武田泰淳がそれぞれの小説の中で、どのようにとらえたかが精緻に分析されている。

第二部では、大江健三郎の『奇妙な仕事』(1957)、『飼育』(1958)、『セヴンティーン』(1961)が論じられている。「奇妙な仕事」論では主人公のアルバイトとしての野良犬殺しの場とナチスの強制収容所が重ねられ、ファシズムにおける人間と動物の分断が明らかにされると分析している。『飼育』論では、動物として扱われている黒人兵の描かれ方をめぐって、同時代批評との関わりで、この時代における動物の位置が考察されている。『セヴンティーン』論では、天皇と同一化することを欲望する主人公の分析をおして、女性や動物への嫌悪が国家への同一化を促す構造を取り出している。

第三部では小島信夫の『馬』(1954)、『墓碑銘』(1959～60)、『抱擁家族』(1965)を取り上げ、小説の中における馬の役割の分析を通して、軍事化された動物としての馬の表象から、国家と個人との関係を明らかにしている。

第四部でははじめに武田泰淳の『富士』(1969～71)を対象に、戦時下の精神病院を舞台にして、国家が設定した人間と動物の枠組をいかにして組みかえるのかを、主人公である医学生の戸惑いを通して明らかにしている。次に大江健三郎の『万延元年のフットボール』(1967)を取り上げ、獣と動物の違いが分析されていく。そして最後に小島信夫の『別れる理由』(1968～81)におけるロバや馬の表象を分析し、小説の形式自体を攪乱するにいたる過程が明らかにされている。

審査の過程で、審査委員からは、日本の軍隊の中における根強い人種主義が、戦争を背景とした形で、動物の表象を呼び寄せていることが精緻にあとづけられていることが指摘された。また 20 世紀における二つの大戦があらためて人間と動物の境界を問い直すような思想的試練を与えたことと、日本の戦争の戦後文学に表れた動物の表象の特異性についての質問も出された。

まだジェノサイドが行われた戦争において、その経験を強いられた者が、人間の動物化に直面せざるをえない必然性を、より理論化するべきではないかという指摘もなされた。

とりわけヨーロッパにおけるナチスによる「ホロコースト」の問題をふまえたクッツェー・アガンベン・デリダ等の理論と、日本が中国大陸をはじめとしてアジアで行った戦争に対する、武田・大江・小島三作家の表現とが、どこまで整合的にかかわっているかをより明確にすべきだとの指摘もなされた。

また議論を進めていく過程において、動物一般という方向に傾斜することがあるが、馬と犬は同じ家畜でも決定的に役割が異なるのであって、動物一般という枠組は成り立たないという批判もあった。

しかし、村上氏の論文は、武田泰淳、大江健三郎、小島信夫という三人の、世代を異にする作家の、それぞれ全く異質な小説の分析を通じ、戦争、戦後社会、家庭という三つの領域において、人間と動物を分ける境界がどのような論理で線引きされ、その分析がどのように機能しているかを明確に開示していると評価された。戦争の場において、人間と動物の境界線は、他国への侵略と植民地化、そして戦場における殺人を正当化する根拠とされたこと。そして自国の国民を兵士へと教育し、軍隊に同一化させるための思想動員の装置としても、人間と動物の差別化が利用されたことを本論文は明確にした。

また、戦後社会においては、人間と動物を差別化する境界線は、他国の国民の苦しみを意識しないようにするため、国内の犯罪者等を処罰したり、学校における規律訓練教育においても使われていることが、本論文ではきわめて具体的に分析されていた。

さらに家庭の中における人間と動物の境界線は、家庭の規範に沿わない男性や女性を処罰する際に機能させられていたことが、本論文を通して確認された。

村上氏は本論文の結論として、武田泰淳、大江健三郎、小島信夫の三作家が人間と動物の境界を乗り越えるために、「混血」、「変身」、「歓待」という三つの方法を小説を通して提示したとする。「混血」は主体が他者としての根本的な関係性を負って成立することを示し、「変身」は人間と動物の境界が反転可能であることを示し、「歓待」は異質な他者を迎え入れることで、拘束から解放され「依存と共存という共通の地平を開示する」と結論づけている。いずれの審査委員も村上氏の論文を高く評価した。したがって、本審査委員会は博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。